

サハラ以南アフリカの国家と政治 のなかのイスラームを可視化する

—地域の文脈を踏まえた研究のために—

佐藤 章

はじめに

サハラ以南アフリカは、歴史的に活発な人口移動が繰り返されてきた場であり、人々同士の盛んな接触と交流を通して、特色ある文化が形成されてきた。信仰や世界観もまたこのなかで作り上げられてきた。アニミズム（精霊信仰）、トーテミズム、呪術など概念的にさまざまに表現される要素を含む、いわゆる「在来」の信仰と呼ばれるものがある。キリスト教やイスラームといった世界宗教も長い時間の経過のなかでサハラ以南アフリカに伝わり、信仰や世界観を作りあげる要素となっている。信仰や世界観はまた、宗教という観点からも捉え得るものである（橋本 2019; 梅屋 2019）。

信仰、世界観、宗教のもつこのような特徴は、これらの事象が、人間の営みである国家や政治の運営にも不可分にかかわることを物語る。このなかで、イスラームにとくに焦点を当てようとする試みが本書である。

2009年の推計によれば、サハラ以南アフリカのムスリムの数は2億4063万2000人とされる（Kenney and Moosa 2014, 448）。サハラ以南アフリカの人口は約8億人なので、人口の3割がムスリムということになる。世界全体のムスリムのなかでサハラ以南アフリカのムスリムが占める比率は15.3%にのぼるといえる。ムスリム世界を広くみても、サハラ以南アフリカのムスリムは比較的大きな存在感を示していることになる。

周知のとおり、近年、サハラ以南アフリカでは、イスラーム主義武装勢力の活

動が活発化し、政治におけるイスラームに一躍注目が集まっている。イスラーム主義武装勢力については、9・11事件後の国際的な時代状況のなかで、国際安全保障を脅かす「テロ」組織という側面から高い関心が寄せられている。サハラ以南アフリカで活動する勢力も国際的な勢力と決して無関係ではないため、研究のうえでも、こういった国際安全保障の観点は欠かせないものといえる。

ただ、政治におけるイスラームについて研究するうえでは、こういったグローバルな視点からだけでなく、サハラ以南アフリカの歴史と社会そのものを問題とする、いわば「地域の文脈」を十分に考慮するような視点もまた欠かせないだろう。サハラ以南アフリカにおいてイスラームは、一千年以上も遡る長い歴史をもっており、社会変容や国家形成の過程とも密接に結びついてきた。今日注目を集めているイスラーム主義武装勢力をみる際にも、このような歴史的、社会的な背景を十分に踏まえることが求められよう。すなわちここで要請されているのは地域研究の視点である。

本書は、地域研究の視点を重視しながら現代アフリカの政治や政策を分析してきた研究者が、サハラ以南アフリカの国家と政治のなかのイスラームについて、事例研究を通して検討した研究プロジェクトの成果である。この研究プロジェクトは、「アフリカの政治・社会変動とイスラーム」と題し、2017～2019年度にアジア経済研究所で実施された。イスラーム主義武装勢力の台頭により突如としてサハラ以南アフリカにおけるイスラームと政治について社会的、学術的関心が寄せられる一方で、植民地化から独立以後までの時代を通して、イスラームが国家と政治とどのようにかかわってきたのかという点に関する研究は必ずしも十分に進んではいないというギャップが、本研究プロジェクトが着手されるきっかけであった。

イスラームを明示的なテーマに掲げた研究プロジェクトは、編者を含めた執筆者全員にとって初めてのことであった。それでも、現代国家の政治や政策を専門的に扱ってきた研究者ならではの視点と発見があり得るに違いないと考えられた。そこで、本研究プロジェクトは「可視化」をひとつのキーワードに掲げ、できる限り具体的な事例のなかで考察することを最終的な焦点とした。この焦点に照らし、植民地期さらにはそれ以前をも視野に入れた時間軸のなかで、歴史的な事象を詳しく分析・再構成することを通して、今日の状況への理解ないし示唆の獲得

を試みた。将来的にサハラ以南アフリカの国家と政治におけるイスラームという大きなテーマを俯瞰できることを目指した、いわば礎石にあたる研究として位置づけられるものである。

この序論では、本書に収めた5本の論文を通して論じようとしたことについて、サハラ以南アフリカのイスラームと国家ないし政治をめぐる歴史と研究状況に照らして、説明をすることとしたい¹⁾。

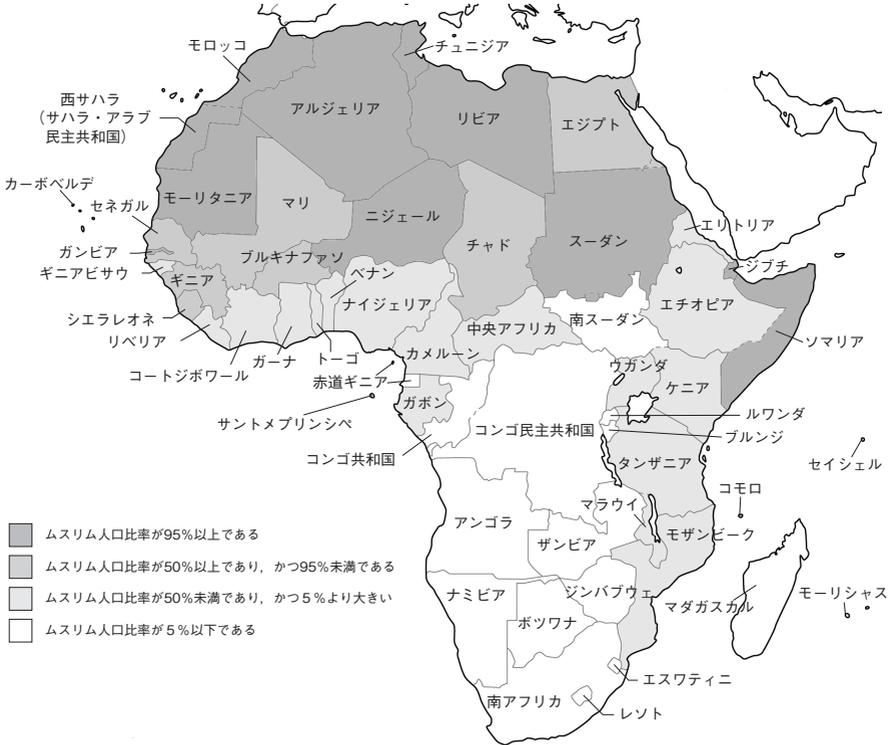
1 サハラ以南アフリカのイスラームの歴史的展開

サハラ以南アフリカの歴史においてイスラームはどのような存在であったのだろうか。まず、サハラ以南アフリカでのイスラームの歴史について簡単に確認しておきたい。イスラームは、アラビア半島と北アフリカを中継点としてサハラ以南アフリカへ伝播した。アラビア半島からはアフリカ北東部のエチオピアとインド洋岸の東アフリカへと、北アフリカからは西アフリカ内陸部へとそれぞれ伝わったとされる(坂井 2010, 98-100)。アラビア半島経由の伝播は早くも8世紀には始まり、海路交易が活発化した13～15世紀頃には東アフリカ沿岸部に多くのイスラーム都市が建設され、この地域でのイスラーム定着の拠点となった(大川 2010)。西アフリカへの伝播では、11世紀のベルベル人による内陸侵攻(ムラービト運動)が重要な契機となった。そののち13世紀に勃興したマリ帝国下ではイスラームはサハラ越え交易と結びついたことで保護を受け、この地域への定着が促進された(坂井2003, 84-85)。さらに時代が下り、19世紀頃になると、アジア方面からさまざまな理由で人々が南部アフリカに移入するようになり、そのなかの人々を担い手としてムスリム・コミュニティが形成されていった。

ムスリムの占める人口比率を国ごとに図示したのが図0-1である。東アフリカでは、スーダン、ソマリア、ジブチが人口の95%を超えるムスリム人口を擁するほか、イスラーム世界との接触の歴史が長いエチオピア、インド洋に面するケ

1) 本序論は、本研究プロジェクトの暫定的成果(佐藤 2018; 2019)での序論の内容を継承しつつ、最終版のかたちで執筆されるものである。このため一部の内容に共通する点がある。

図0-1 アフリカ諸国のムスリム人口比率



(出所) Kettani 2010に基づき筆者作成。

ニア、タンザニア、モザンビーク、マラウイにおいて一定規模のムスリム人口があることがわかる。インド洋の島嶼国ではコモロの人口の大半をムスリムが占め、モーリシャスにも一定規模のムスリムが居住している。西アフリカから中部アフリカにかけては、モーリタニア、ニジェール、ガンビアを筆頭に、セネガル、ギニア、シエラレオネ、マリ、ブルキナファソ、チャドなど、ムスリム人口の比率が高い国々が多くみられる。さらに西アフリカではこれらの国々より南部に位置するリベリア、コートジボワール、ガーナ、トーゴ、ベナン、ナイジェリア、カメルーン、中央アフリカ、ガボンにおいても、人口の過半数にはいたらないものの一定規模のムスリムが居住していることが確認できる。サハラ以南アフリカのこれ以外の地域ではムスリム人口の比率は5%より少ない。今日のこのような分布状況は以上に述べた伝播の歴史的な傾向を反映したものとして理解できるだろう

う。

サハラ以南アフリカの大半の地域は、19世紀末から本格化した西欧列強による植民地化を通して近代国家のもとでの統治を経験することとなり、植民地期の統治機構を継承するかたちで政治的独立を達成した。近代国家のもとでの政治の展開をみるには、植民地化以降が主要な検討対象となる。

イスラームがすでに広く定着し、イスラームと不可分に結びついた強力な政体が存在していた地域においては、ムスリムは、植民地化への抵抗運動の重要な基盤となった。19世紀に展開されたスーダンのマフディー運動や、西アフリカのトックロール帝国の活動がこの代表的な例として知られる。ただ、サハラ以南アフリカ全体を見渡した場合、植民地化・植民地支配への抵抗運動の基盤としては、イスラームだけでなく、在来の信仰（例としてマジマジの反乱）、土着化したキリスト教（例としてキンバングイズム）、民族（例としてマウマウの反乱）なども指摘できる。イスラームだけが特別に抵抗運動の基盤となりやすかったわけではない。また、ムスリムが多数を占める地域では必ず抵抗運動が起こったということでもなかった。フランス領西アフリカでみられたように、いったん植民地支配が確立されたのちには、ムスリムの名士たちがおもに信仰を守ろうという動機から、統治の仲立ちをする立場を選択することもまたみられた。

1940年代半ば以降、アフリカ各地では独立運動が高揚していった。このなかでサハラ以北の地域では、運動を支える強固な連帯の柱としてイスラームが前面に掲げられた事例が知られる。イスラーム、アラブ、アフリカを三位一体的に連帯のよすがとして掲げたエジプトのナセリズムがその一例である。だがサハラ以南においては、イスラームを明示的に組み込んだ連帯のイデオロギーが独立運動の中核をなした事例はあまり見当たらない。1950年代半ばから続々と独立が達成されていくが、この時期ないしこの時期以降でもまた、イスラーム法の施行やイスラームの復興運動をめぐる政治的な動きは、一部の国々ではみられたものの、サハラ以南アフリカに広くみられる問題として展開されていくことはなかった。

このようにサハラ以南アフリカの近現代政治史を概観すると、イスラームがたしかに一定の政治的な役割ないし存在感を示してきたことは確認できるものの、それは、各地において広くみられた現象というよりは、特定の地域ないし時代に限定されたものであったという整理が適切だと考えられる。

しかしながら、このような状況には、21世紀に入り、一定の変化をもたらされている。変化というのは、ほぼ同時期にイスラーム主義武装勢力の活動が活発化したことである。この現象は、サハラ以南アフリカにおけるイスラームと政治の関係を改めて検討する必要性を提起した。その点を次節ではみていきたい。

2 21世紀以後の新しい問題状況

21世紀のサハラ以南アフリカは、イスラーム主義武装勢力の活発な活動を経験している。ソマリア南部で活動するアッシャバブ (Al-Shabaab) は、支配地域をなかば統治するようなかたちで拠点を築き、ケニアやウガンダといった周辺国で爆破・襲撃・誘拐などの活動を展開している。アルカーイダに対する忠誠を表明している組織でもある。無政府状態が1990年代以降続いてきたというソマリアの状況に適応するかたちで存続してきた同組織は、暫定政府による統治が試みられている現在のソマリアにとって、国家の再統合を妨げる勢力となっている。このため、ソマリア暫定政府を支援するアフリカ連合が派遣する軍事部隊「アフリカ連合ソマリアミッション」(AU Mission in Somalia: AMISOM) との間での戦闘が続いている。

ナイジェリア北東部で活動するボコ・ハラム (Boko Haram) は、この地域でローカルに維持されてきたイスラームに基づく異議申し立て運動の流れをくむものだが、それまでにはなく武装闘争路線を強めているのが特徴である。ナイジェリア北部での爆破事件の標的には、ナイジェリア政府の治安部隊や国際機関などだけではなく、一般の人々が集まる市場なども含まれる。さらに2014年には女子生徒数百人を拉致する事件で国際的に広く知られるようになった。その組織名は現地の言葉であるフラニ語で「西欧的教育は罪」を意味するものといわれ、強いイデオロギー性を誇示する点にも特徴がある。イスラーム国 (Islamic State: IS) への忠誠を表明しており、「イスラーム国の西アフリカ州」(Islamic State West Africa Province: ISWAP) という名称でも呼ばれる。

イスラーム・マグレブ諸国のアルカーイダ (Al-Qaeda in the Islamic Maghreb: AQIM) は、もともとアルジェリアで活動してきた組織であるが、潜伏地の確保

や密輸の利権などを求めてサハラ、サヘル地帯へ進出し、地元の人々に溶け込む形でこの定着を図ってきた（渡邊 2012）。2012年には、リビアのカダフィ政権崩壊という地域情勢の動揺を利用するかたちで、マリ北部のトゥアレグ民族による分離独立運動を支援し、一時は独立宣言をさせるまでにいった（佐藤 2017）。その後、フランスの軍事介入などで退勢に追い込まれたが、流れをくむ複数の組織がいまだに活動を続けている。これらの組織や、その活動に感化された小集団によって、マリ、モーリタニア、ブルキナファソ、コートジボワールなどで襲撃事件が起こされている（坂井 2016; 佐藤 2020）。

これらのイスラーム主義武装勢力の登場にともない、イスラームは、サハラ以南アフリカの今日的な政治を語るうえでの重要なキーワードに躍り出た。各勢力は、サハラ以南アフリカの各国にとって治安上の重要な関心事となっており、有効な対処のうえではアフリカ諸国同士、またアフリカ域外の主体との協力が不可欠である。また、アフリカ域外の主体には、国際安全保障上の関心からこの取り組みに関与するという動機もある。イスラーム主義武装勢力の問題は、政治、治安、安全保障の観点から、アフリカとそれを取り巻く世界におけるひとつの問題状況として浮上してきているのである。

3 新たな展開を踏まえた研究状況

以上にみたような歴史的展開に照らして、次に、イスラームと政治に関してこれまでどのような研究が行われてきたかを確認し、本研究が依拠する研究方針について述べることにしたい。

サハラ以南アフリカのイスラームに対しては、伝播の歴史的展開の再構成、重要な宗教家や教派に着目した思想・思想史の研究、信徒集団への参与観察などを通した宗教実践の研究などが盛んに行われてきた（Levtzion and Pouwels 2000; Rosander and Westerlund 1997; Loimeier 2013; 嶋田 1995; 坂井 2003; 荻谷 2012）。これらの研究蓄積は大きな厚みをもつ。このなかで植民地化から今日にいたる近代国家のもとで展開される政治のなかでのイスラームの役割に関しても重要な研究がこれまでにいくつか発表されてきている（Cruise O'Brien 1971;

2003; Launey 1982; 1992; Brenner 1993; 小川 1998)。ただサハラ以南アフリカのイスラームを扱う研究のなかで、近代国家やそこで展開される政治に関わる研究が相対的に手薄であったことはひとつの傾向として指摘できることと思われる。

そのようななか、前節で述べたような近年の情勢を背景に、サハラ以南アフリカにおけるイスラームと政治をめぐる研究が、2000年代に入ってから本格的に着手され始めている。まず各イスラーム主義武装勢力に個別に焦点を当て、その活動の経緯や特徴を記述する研究が、歴史学、人類学、政治学、地域研究などさまざまなアプローチに立つ研究者によって発表されている (Harmon 2010; 2014; Boilley 2012; 渡邊 2012; 坂井 2016; 2017; 津田 2012; 島田 2014; 遠藤2015; 佐藤 2017)。これらは、各勢力の歴史と現状についてコンパクトに把握することを目指す、時宜を捉えるタイプの研究である。

国際安全保障研究やテロリズム研究などの立場からも、サハラ以南アフリカの動向に関するファクトの整理や分析などが数多く発信されている (Larémont 2011; Zenn 2015a; 2015b; Zenn and Cristiani 2016)。これらの研究は、アメリカが主導してきた「対テロ」戦争の動向や、アルカーイダ、タリバン、イスラーム国といった、アフリカ域外の勢力との関係などに関する情報を提供してくれる。なお、このようなスタンスからの研究に関しては、アフリカの現地の情勢を十分に踏まえた理解が不可欠だとする批判的な注意喚起もなされている (Dowd and Raleigh 2013; Solomon 2015)。この点は、いわゆるグローバルな枠組みでイスラーム主義武装勢力に注目する研究と、サハラ以南アフリカの地域的文脈を重視する研究とを接合する際に欠かせない注意点だといえるだろう。

これらの研究は、新たな事態の展開をフォローすることに力点を置いた研究といえるが、これと同時に、サハラ以南アフリカにおけるイスラームと政治という大きなテーマを俯瞰するような研究もまた試みられ始めている。そこでは、サハラ以南アフリカの民主化期である1990年代以降の動向ないしは9・11事件後の状況という比較的短期の時代状況に照らしての研究と、植民地化以降ないしは独立以降というより長期の変容過程のなかで考察する研究とに、大きく方向性が大別されている。

前者の比較的短期の時間軸に立つ研究の代表的なものとして、オタイェックとソアレスが編集した『アフリカにおけるイスラーム、国家、社会』(Otayek et

Soares 2009) があげられる。この論文集では、9・11事件後のグローバルな文脈を明示的に念頭に置き、トランスナショナリズム、現代政治、公共空間といったキーワードを通して、いわゆる「ローカルとグローバル」の相互作用ないし緊張関係のなかで各国のムスリムが置かれた状況を捉えようとする視座が提示されている。各国のムスリムがそれぞれの社会における公共的な問題を認識し、その行動のためのアリーナとして政治や国家の問題が浮かびあがるという連関がそこには提示されている。

後者のより長期の時間軸に立つ研究の代表として、ゴメス＝ペレスが編集した『サハラ以南における政治的イスラーム』(Gomez-Perez 2005) があげられる。ゴメス＝ペレスがもっとも重要なキーワードとして掲げるのは「長期持続」である。ゴメス＝ペレスは、政治的イスラームに関するこれまでの研究がもっぱら中東や北アフリカを対象としてのみなされ、サハラ以南アフリカに関してはほとんどなされてこなかったが、それは単に研究の不在であって、サハラ以南アフリカにおいても現に政治的イスラームの現象が歴史的にさまざまなかたちでみられたのだという認識から出発する (Gomez-Perez 2005, 7)。これは、サハラ以南アフリカにおける政治的イスラームが近年になって急遽浮上したものではないことを再確認させてくれる指摘である。すなわち、ここで「長期持続」というキーワードは、単に長めの時間軸を採用するというのではなく、サハラ以南アフリカにおけるイスラームの歴史の実態を踏まえた場合、必然的に長期の時間幅を考慮する必要があるという認識に基づいて提起されているのである。

以上の整理を踏まえ、本書の研究史的な位置づけについて述べたい。本序論の冒頭で記したとおり、本研究は、「イスラーム主義武装勢力の台頭により突如としてサハラ以南アフリカにおけるイスラームと政治について関心が寄せられる一方で、植民地化から独立以後までの時代を通して、イスラームが国家と政治とどのようにかかわってきたのかという点に関する研究は必ずしも十分に進んではいない」という現状認識から出発したものである。そして、この認識に照らして、「植民地期さらにはそれ以前をも視野に入れた時間軸のなかで、歴史的な事象を詳しく分析・再構成することを通して、今日の状況への理解ないし示唆の獲得」を試みようとしている。この認識と方針は、ゴメス＝ペレスが提起した長期持続の視座にまさに合致するものといえるだろう。イスラームと政治をめぐる問題が、単

に近年だけのことなのではなくて、より遡った時代にも存在したことを再確認しようとする、本書の「可視化」というキーワードもまた、ゴメス＝ペレスが示した視座に呼応するものといえよう。

4 地域の文脈に立った研究

長期持続の視座に立った可視化の試みとしての本書では、同時に、地域の文脈ということを経験して研究を展開しようとしている。それは、イスラームと政治に関する研究が単にこの個別テーマそのもののみ寄与するのではなく、サハラ以南アフリカという地域をどう理解するかという、より幅広い地域研究の関心にも寄与するものであることを目指すためでもある。

地域の文脈が意味するところは、同じサハラ以南アフリカのなかでもよりローカルな場に注目した場合、さまざまに指摘できるものであるわけだが、本書での考察全体を通して提起しうるものとしては、以下の3点が共通の文脈として指摘できるものと編者は考えている。

第1は社会の多元性である。ムスリム人口比率が国によって異なることを上で確認したが、このことは、多くの国においてムスリムは異なる信仰の人々と共存していることを意味する。国民のほとんどがムスリムである国の場合でも、民族や氏族などが多様である場合も多い。このことは地域間で信仰や文化の差異があることを意味している。加えて、地域間の違いもそこでは視野に含められてくるわけだが、地域間の違いがしばしば経済的な格差の問題として立ち現れることも異論がないだろう。このようにサハラ以南アフリカはさまざまな領域において極めて多元性の高い社会をもつことを特徴とするが、イスラームがこのような多元性のなかの一要素としてそこに存在しているという認識は重要だろう。この認識に立つことにより、サハラ以南アフリカのイスラームが、常に他の社会的要素との緊張、対立、協調、共存といったなかに置かれていることもまた認識できるからである。

地域の文脈の第2点目は、植民地期以降、国家形成ならびに制度構築の過程がダイナミックに展開されてきたことである。サハラ以南アフリカは、以上に述べ

たような多元社会に適合するべく、国家による統治の確立がさまざまなかたちで試みられてきた地域である。植民地期に導入された間接統治はその端的な例である。上でフランス領西アフリカの例を示したように、ムスリムに統治上の役割が担わされることもあった。独立後も国内の地域的民族的な差異は政党政治の動向を左右する大きな要因であり、各国政府は多大な努力を払って国民統合や国家の一体性を追求してきた。この過程は、多元社会を構成するさまざまな要素や属性を担う人々にとっては、自らの生存やアイデンティティを守るために、他の要素・属性を担うアクター群と絶えざる相互作用と調整を実践する過程でもあった。サハラ以南アフリカのムスリムにとっても同様に、この過程は、国家との関係においては国家形成や制度構築のあり方に関与する過程そのものであった。

地域の文脈の第3点目は、アフリカが孤立した大陸ではなく、常に外部との交流に晒されていたこと、である。これは近現代に限らず、より幅広い歴史的なスパンのなかで妥当する特徴である。アフリカは歴史的にみて、内在的に独自の文明が生成、展開する場であると同時に、域外からのさまざまな要素が流入する場であった。イスラームは流入した要素の代表的なものであり、域外での運動や思想の潮流を反映して、さまざまな宗派、教理、思想がサハラ以南アフリカに波及した。ヨーロッパ人が持ち込んだ文化や制度もまた流入要素である。これらの流入要素によって、その時点で内在的に存在していた社会や文化のあり方は絶えず再編されることになった。イスラームも、今日的な国家のあり方と結びついた政治も、常に新たに流入し、かつ、サハラ以南アフリカという場に即して再編されるものであった。

これら3点の地域の文脈を意識しながら、長期持続の視座に立つ可視化の作業に取り組んだのが本書ということになる。次に、本書を構成する各論文の概要を紹介していきたい。

5

長期持続の視座に立つ可視化の作業 ——各論文の紹介——

本書の各論で扱った国・地域は、ナイジェリア、ケニア、ソマリア、旧フランス領西アフリカ、南アフリカであり、近年のアフリカでの主要なイスラーム主義

武装勢力の活動地域がカバーされている。また、サハラ以南アフリカの重要国である南アフリカでイスラームの問題がどのような展開をみせているかも視野に入れている。加えて、今日のサハラ以南アフリカにおいてムスリムの人口分布を語る際の重要な3カ所（西アフリカ、東アフリカ、南部アフリカ）の各地域をカバーしてもいる。

これらの各論は、執筆者それぞれの対象地域でイスラームをめぐるどのような問題が存在しているのかという基礎のところから研究に着手し、今日の国家や政治の状況を踏まえた際に可視化されておくべき事象は何かという自由な論点探索の作業を経て、執筆されたものである。最終的にすべての各論が、歴史を遡る視点を採用したことはすでに言及したとおりである。執筆者はみな現代政治や国家に強い関心をもっている研究者であるが、カレントな状況そのものに焦点を当てる以前に、長期の歴史的な背景を的確に踏まえることが重要だと認識が提示されたことになる。

まずは歴史の知識を踏まえた視座の確立こそが最優先されるべきだということが、研究プロジェクト全体の主張となるわけだが、この主張に照らし、各論文が、サハラ以南アフリカにおけるイスラームと政治を考えるうえでいかなる意義をもつものなのかを、以下順に説明したい。

第1章「植民地期の北部ナイジェリアにおけるシャリーアの適用——原住民裁判所制度の変遷を中心に——」は、「植民地期の北部ナイジェリアにおけるシャリーア適用のあり方の「実像」を、いわば巨視的に浮かび上がらせ」ようにするものである。この論文は、具体的な考察対象を1900～1960年に据えてはいるが、2000年代以降の状況を視野に入れて書かれたものである。2000年代に入り北部ナイジェリアでは、シャリーアの刑罰規定の復活を求めるムスリムとそれに反対する非ムスリムの緊張が高まり、各地で暴動が発生した。「シャリーア紛争」や「シャリーア問題」と呼ばれるこの現象は、2000年代後半には一転して沈静化に向かった。沈静化に向かった背景について第1章が注目するのは、シャリーアの刑罰規定の復活を主導したムスリム・エリートたちが、イスラーム刑法の再導入はするものの、厳しい刑罰規定を厳格に適用することはできる限り回避したことである。すなわち、北部ナイジェリアのムスリム・エリートたちの「冷静さ、謙抑さ、あるいは一種のバランス感覚」が非ムスリムたちを安心させ、緊

張緩和をもたらす鍵になったのだという。

第1章は、このようなムスリム・エリートたちの「冷静さ、謙抑さ、あるいは一種のバランス感覚」が、同じ北部ナイジェリアですでに植民地期においても観察されていたことを丹念に描き出している。すなわち第1章は、ムスリム・エリートたちが隔たった時代において共通した態度をとったことを再発見、再評価するものである。植民地期と独立後という異なる時代において、司法に関するムスリムの志向性と国家の制度との間には、常に一定の緊張があり、その緊張をめぐる政治的な交渉や駆け引きはムスリム以外の人々も存在するなかで行われた。このまさに本研究プロジェクトでいう地域の文脈に合致する場において起こりうる人々の動きを再構成した点に第1章の眼目がある。むろんそこには、イスラーム復興運動のアフリカ域外からの流入という地域の文脈もまた介在している。植民地期に起こった出来事を理解することが、今日的な状況の理解に的確に寄与することを第1章は雄弁に物語っている。

第2章「ケニアにおけるイスラーム法適用の史的展開——オマーン系アラブ人による支配とイギリス植民地統治下の裁判制度——」は、「ムスリム・コミュニティが置かれてきた／置かれている制度的な側面については、いまだ十分な研究が積み上がっているとはいえない」との認識から出発する。ケニアは世俗国家であることをうたいつつも、司法の面ではムスリムに対してイスラーム法を適用することが独立以来一貫して憲法に明記されてきたという。ケニアではキリスト教徒やヒンドゥー教徒も存在するが、これらの宗教的コミュニティが司法制度において特別の扱いを受けているわけではなく、ムスリムだけが特異な地位にあるのだという。この特異な地位は、ケニアの領域国家としての成立過程で、特定の社会集団（ムスリムであるオマーン系アラブ人など）が支配的な地域（10マイル帯状地域）が領土に組み込まれ、その地域での司法慣行が廃絶されることなく維持され、ひいては憲法での言及に反映されてきたという歴史的経緯によるものであることを、第2章は丹念に再構成している。

すなわち第2章は、ケニアという国家の成立過程のなかで、地域的な特性と宗教的な多元性が制度構築のなかでどのように処遇されるかという問題を検討したものである。ケニアのムスリムのこの特異な地位が、ケニアのナショナルレベルの議論においては、他の宗教集団の権利との兼ね合いでしばしば見直しを求める

議論の対象になるとのことも第2章は指摘している。その意味で第2章が扱うテーマは、歴史的なものでありながらも、現代かつ現在進行中のものといえる。この章もまた、多元性と制度構築という地域の文脈を正面から扱ったものなのである。

第3章「ソマリア政治史におけるイスラームの変遷とその現在」は、「テロ組織」という観点からのみアッシャバーブに注目することが、「その性格を十分に理解することにはつながらない」という認識から出発する。「アフガニスタンから持ち込まれ、アルカーイダの影響を強く受けてきた組織である側面をもちながらも、「ソマリアにおける政治的イスラームの歴史から産み落とされた存在」という観点からの捉え直しの作業が改めて必要となる対象」だと第3章は指摘する。そのうえで、アッシャバーブが、依然として大きな規模を維持し、東アフリカに勢力を拡大する傾向を「継続性」という観点で捉え、それが意味するものは何かを問おうとしている。

この研究プロジェクトで扱った国のなかでソマリアはもっともムスリムの人口比率が高い国といえる。ソマリの民族アイデンティティにとってムスリムであることが重要な位置を占めることを踏まえれば、ソマリ民族の国としてのソマリアは、ムスリムの国だとの理念的な自己規定をもつとも表現できる。この点を考えれば、他の国とは違い、ソマリアは、イスラームが宗教的な多元性のなかにある国ではない。ただ、このようにムスリムが支配的な社会であっても、そこにあるのは同質的な社会ではない。第3章で記述されているとおり、ソマリアでは宗教に対する態度にさまざまな分岐がみられ、それは氏族の問題とも絡みながら、政治勢力間のスタンスの差や支持基盤の差として発現するものでもある。宗教に対する態度の分岐に関しては、中東諸国から波及したイスラームの改革を目指す運動をどう受け止めるかがとりわけ重要だとも指摘されている。このように第3章もまた、社会のある水準における多元性の問題との関わりのなかでイスラームを論じている。

また、第3章は、イスラーム復興運動に代表されるようなグローバルに展開される宗教の動向が波及したときに、それに触発されていかなる政治的な動きが展開されるのかという問題意識を強く提示した論文でもある。それを植民地期から今日にいたるまでの長期持続のなかで捉えることにより、アフリカ域外から及ん

だイスラームの思潮がどのように組織の基盤を下支えするのかをソマリアを事例としながら検討し、新たな視座の確立を目指そうとしている。第3章が強く打ち出すこの論点は、先行する2つの章にもまた共鳴するものだろう。第1章で扱った北部ナイジェリアは、もともとソコト・カリフ国が存在し、19世紀にはジハード運動が展開されてもいた。アフリカ域外のイスラームの思潮を受けて地域的に展開されたこの経験が、20世紀のナイジェリア植民地においても歴史的背景として当然ながら存在しており、それを踏まえて第1章が取り上げた事象が展開されたのであった。第2章が扱ったケニアの東海岸も、オマーンの帝国支配の問題と不可分であり、その広域的な展開のなかでイスラームが持ち込まれてくる過程ならびにその歴史的帰結にかかわる問題として、ケニアでのカーディー裁判所が存在していたわけである。その意味でこれらの3章は、域外との絶えざる交流のなかでアフリカの歴史が展開されてきたことを再確認させてくれるものであり、イスラームを検討する際にもその視点が重要であることを教えてくれる。

第4章「失われた連帯の痕跡を求めて——植民地期コートジボワールにおける独立運動とイスラーム——」は、アフリカのフランス領での独立運動の担い手として存在感を放ったアフリカ民主連合 (Rassemblement démocratique africain: RDA) という組織に着目し、独立運動とムスリムの関係について問うものである。RDAは植民地を横断してアフリカ人の組織化を目指す組織であった。RDAが示した植民地横断的な志向と植民地当局への強い対抗姿勢は、当時の西アフリカにおいてイスラームの改革運動を志向していたムスリムたち（復興運動系の者とスーフィー主義の改革志向の者の双方）から強く支持され、RDAの重要な支持基盤となっていった。第4章では、RDAの創設者の出身地であり、RDA系の政党が最も華々しい政治的成功を収めた植民地のひとつであるコートジボワールに焦点をあて、RDAと改革派ムスリムの連帯の成立と崩壊の過程を描くものである。

サハラ以南アフリカのなかで西アフリカは、ムスリムの人口比率が相対的に高い地域であるが、独立後の政治におけるイスラームの影響力は顕著に強いというわけではない。別の面からみればそれは、ムスリムが政治から一定の距離をとってきたことの帰結であったともいえる。そのような距離感がどのようにできあがってきたのかは、今日的状況のなかでのイスラームと政治の関係を考える際の歴史的背景として注目される。これに関して第4章は、政治運動を主導したエリー

トたちがイスラームを動員の資源として利用しながらも、イスラームをとくに優遇したり、その利害の代弁者として振る舞おうとする選択肢をとらなかったことを、コートジボワール植民地の事例を通して示している。これを本研究プロジェクトの「地域の文脈」に照らして言い換えるならば、政治勢力は多元社会を構成する要素に広く働きかけるなかで主導権を確立しようとし、その結果イスラームは社会の一要素として以上の存在意義を政治闘争のなかで発揮することができなかったという表現が可能である。このことはイスラームと政治の関係を考えるうえで、サハラ以南アフリカにおける社会の多元性との関係がとりわけ重要になることを物語っている。

多元社会においてムスリムが直面する課題について、第5章「南アフリカにおけるインド系ムスリム——二重のマイノリティとしての位置づけと宗教的実践——」は、多くの示唆を与えてくれる。第5章は、大陸外からの移住者とその子孫（インド系）に注目し、宗教と「人種」という「二重のマイノリティ」の立場にあった人々の信仰とコミュニティについて、歴史的な射程のなかで整理を試みている。人種隔離・人種差別政策が強化されていくなか、インド系の対応は一樣ではなかったのだという。これはインド系のなかの社会階層の分化がひとつの背景となっており、インド系の運動組織が急進化の傾向を示す一方、インド系ムスリム商人／ビジネスマンが、政府に対する抗議行動ではなく交渉を志向する保守的な姿勢を貫いたことに端的にみられる。とはいえ、インド系ムスリム商人／ビジネスマンはインド系の生活改善活動には積極的な取り組みを行い、それが南アフリカにおいてイスラームの教えに基づく慈善活動が発展する源流になったと第5章は指摘している。

南アフリカのインド系ムスリムがたどったこのような歴史は、多元社会における国家の制度構築というよりは、人種隔離・人種差別政策が構築されていくなかで、コミュニティとしての生活基盤の確立を目指す動きとして整理することができそうである。多元主義が認められないアパルトヘイト体制下の制度的環境に対応するなかで、相互扶助の促進という対処法が編み出され、その相互扶助の取り組みを通して、インド系ムスリムというアイデンティティが保持されたという側面も認められるだろう。この点を他の章との対照で整理し直すならば、南アフリカのインド系ムスリムにとっては、国家の制度（第1章、第2章）や、政治（第3章、

第4章)だけではなく、人々の日常生活が営まれる社会そのものが、生存とアイデンティティにおける一大焦点となったと表現できるかもしれない。また、コミュニティとしての活動の延長上に、それが新たな移民を受け入れる窓口になったり、アフリカ域外からのイスラームの思潮を受け入れる接点となったりという、外部との交流の側面がみえるところも興味深い。

序論のむすびとして

さて、以上、5つの章の概要と意義について整理してきた。そこで示されているように本書は、国家と政治の今日のあり方に関心をもつ研究者が、長期持続の視点に立って歴史を遡るとい研究潮流に呼応するかたちで、おのおのの対象国の事例研究に取り組んだ成果である。カレントな状況そのものに焦点を当てる以前に、歴史の知識を踏まえた視座の確立をまず最優先すべきという主張がそこには込められている。社会の多元性、制度構築・国家形成という課題、外部との交流という地域の文脈が、各国それぞれのかたちで歴史事象に介在していることも各論文を通して具体的に示されており、これらがサハラ以南アフリカにおけるイスラームと政治を考える際の基本的な着眼点となり得ることも本研究の成果として提示できるように思われる。

サハラ以南アフリカのイスラームと政治に関するより俯瞰的な歴史像の確立、ならびに、今日的状況の的確な理解に資するような研究への展開を目指して、その最初の一步として本書を提示したいと考える。

[参考文献]

〈日本語文献〉

梅屋潔 2019.「呪術と科学——科学が進歩しても、呪術はなくなるらない？」松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本茉莉編『アフリカで学ぶ文化人類学——民族誌がひらく世界』昭和堂。

遠藤貢 2015.『崩壊国家と国際安全保障——ソマリアにみる新たな国家像の誕生』有斐閣。

- 小川了 1998.『可能性としての国家誌——現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社.
- 大川真由子 2010.『帰還移民の人類学——アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』明石書店.
- 荻谷康太 2012.「19世紀後半における西アフリカのイスラームと王権——アフマド・バンバの政治権力観とその思想的連関網」『アジア・アフリカ言語文化研究』(83) 59-88.
- 坂井信三 2003.『イスラームと商業の歴史人類学——西アフリカの交易と知識のネットワーク』世界思想社.
- 2010.「アフリカに拡大するイスラーム」小杉泰編『イスラームの歴史2 イスラームの拡大と変容』山川出版社.
- 2016.「マリのイスラーム過激派組織「マシーナ解放戦線 (Le Front de libération du Macina, FLM)」の社会的背景」『Radical Islamist Research Report』(1).
- 2017.「イスラーム改革運動の歴史的展開——仏領西アフリカと英領ナイジェリアの教育改革の比較から」『Radical Islamist Research Report』(8).
- 佐藤章 2017.「イスラーム主義武装勢力と西アフリカ——イスラーム・マグレブのアル=カーイダ (AQIM) と系列組織を中心に」『アフリカレポート』(55) 1-13.
- 2020.「西アフリカ・サヘル地域でのイスラーム主義武装勢力の活動——歴史的背景と現状」『中東研究』(538) 26-37.
- 編 2018.「アフリカの政治・社会変動とイスラーム (基礎理論研究会成果報告書)」アジア経済研究所.
- 編 2019.「アフリカの政治・社会変動とイスラームに関する中間成果報告 (調査研究報告書)」アジア経済研究所.
- 島田周平 2014.「ボコハラムの過激化の軌跡」『アフリカレポート』(52) 51-56.
- 嶋田義仁 1995.『牧畜イスラーム国家の人類学——サヴァンナの富と権力と救済』世界思想社.
- 津田みわ 2012.『ケニアからみたソマリア問題』『アジ研ワールド・トレンド』(205) 30-32.
- 橋本栄莉 2019.「神話と宗教——世界の秘密を解き明かす知と技法」松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本栄莉編『アフリカで学ぶ文化人類学——民族誌がひらく世界』昭和堂.
- 渡邊祥子 2012.「マグレブのアル=カーイダとその射程——「アラブの春」とサヘルをめぐる」『アジ研ワールド・トレンド』(205) 10-13.

〈外国語文献〉

- Boilley, Pierre 2012. “AQMI et le terrorisme islamique au Sahel: Isolement ou enracinement?” In *Islam et sociétés en Afrique subsaharienne à l'épreuve de l'histoire: un parcours en compagnie de Jean-Louis Triaud*. dir. Odile Goerg et Anna Pondouppoulo. Paris : Karthala, 379-389.
- Brenner, Louis ed. 1993. *Muslim Identity and Social Change in Sub-Saharan Africa*. London: Hurst & Co.
- Cruise O'Brien, Donal B. 1971. *The Mourides of Senegal: the Political and Economic Organization of an Islamic Brotherhood*. Oxford: Clarendon Press.
- 2003. *Symbolic Confrontations : Muslims Imagining the State in Africa*. London: C Hurst & Co.
- Dowd, Caitriona, and Clionadh Raleigh 2013. “The Myth of Global Islamic Terrorism and Local Conflict

- in Mali and the Sahel (Briefing).” *African Affairs* 112(448): 489-509.
- Gomez-Perez, Muriel dir. 2005. *L’islam politique au sud du Sahara: Identités, discours et enjeux*. Paris: Karthala.
- Harmon, Stephen 2010. “From GSPC to AQIM: The Evolution of an Algerian Islamist Terrorist Group into an Al-Qa’ida Affiliate and Its Implications for the Sahara-Sahel Region.” *Concerned African Scholars Bulletin* No. 85 (Spring): 12-29.
- 2014. *Terror and Insurgency in the Sahara-Sahel Region: Corruption, Contraband, Jihad and the Mali War of 2012-2013*. Surrey and Burlington: Ashgate.
- Kenney, Jefferey T. and Ebrahim Moosa eds. 2014. *Islam in the Modern World*. London and New York: Routledge.
- Kettani, Houssain 2010. “Muslim Population in Africa: 1950-2020.” *International Journal of Environmental Science and Development* 1 (2): 136-142.
- Larémont, Ricardo René 2011. “Al Qaeda in the Islamic Maghreb: Terrorism and Counterterrorism in the Sahel.” *African Security* (4): 242-268.
- Launay, Robert. 1982. *Traders without Trade: Responses to Change in Two Dyula Communities*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- 1992. *Beyond the Stream: Islam and Society in a West African Town*. Berkeley: University of California Press.
- Levtzion, Nehemia, and Randall Pouwels eds. 2000. *The History of Islam in Africa*. Athens: Ohio University Press; Oxford: James Currey; Cape Town: David Philip, 2000.
- Loimeier, Roman 2013. *Muslim Societies in Africa: A Historical Anthropology*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
- Otayek, René, et Benjamin Soares dir. 2009. *Islam, Etat et Société en Afrique*. Paris: Karthala.
- Robinson, David 2004. *Muslim Societies in African History*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosander, Eva Evers, and David Westerlund eds. 1997. *African Islam and Islam in Africa: Encounters between Sufis and Islamists*. London: Hurst & Company.
- Solomon, Hussein 2015. “Critical Terrorism Studies and Its Implications for Africa.” *Politikon* 42(2): 219-234.
- Zenn, Jacob 2015a. “Islamic State and West Africa.” *Terrorism Monitor* 13(24): 28-31.
- 2015b. “The Sahel’s Militant ‘Melting Pot’: Hamadou Kouff’a’s Macina Liberation Front (FLM).” *Terrorism Monitor* 13(22): 3-6.
- Zenn, Jacob, and Dario Cristiani 2016. “AQIM’s Resurgence: Responding to Islamic State.” *Terrorism Monitor* 15(5): 5-8.

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示-改変禁止4.0国際」の下で提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/deed.ja>



